
Dロード(プロローグ)

JUDO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dロード（プロローグ）

【Nコード】

N3048R

【作者名】

JUDO

【あらすじ】

遙か昔、竜と呼ばれた生き物が住んでいた頃の話。ラック村に住んでいるディノは普段のように悪戯をして楽しむように遊んでいたのだが、ある日突然、村が黒い竜に襲われた。崩壊した村の中で少年は誓った。

「竜を………殺す！！」

今、復讐の旅が始まる。

プロローグ1（前書き）

初めて長編にチャレンジします。ゆっくりと時間をかけて続編を書きたいと思います。気長に見てやってください。よろしく願います

プロローグ1

かつて世界には竜がいた。

竜は神であり、悪魔であり、正義であり、邪悪であり、同時に『無』であった。

ラック村

「こらあーっ！！ディノーっ！！ケンーっ！！またうちの畑の野菜盗んだねーっ！！今日という今日は絶っっ対に許さないよーっ！！」

「へへーっ！！やなこったーっ！！」

「あははははっ！！」

手にいっぱい野菜を持った10才ぐらいの子供が二人、麦藁帽子のおじさんから猛ダツシュで逃げていた。「しっかしさ、しっこく追うよなファルドおじさんもさ。」

「全くだよ。」

二人はそう言いながら村の中を右や左と翻弄しながら疾走していた。

「ケン！あそこの角を右な！！」

「合点！」

打ち合わせの場所で二人が家の角を曲がった瞬間だった。

「こらッ！！」

ポカッポカッ

いきなり拳が飛んで来て二人の額に当たった。

「てっ！！」

「ぎゃんっ！！」

二人は口々に悲鳴をあげてから地面へとダイブした。

ドザーッ

「ってーな！！何すんだよりーア！！」

ケンが服に着いた土を払いながら憤慨して言った。

「あんた達が枝拾いサボってどこかに行つたからでしょ!! デイノのお母さんに頼まれて探しに来たんだからね!!」

リーアと呼ばれた10才ぐらいの少女は似合わないショートカットをこれでもかと揺らしながら言った。ちなみにデイノやケンとは幼なじみである。

「べつ、別にサボってねーよ!! 枝拾いが終わったから遊びに行つただけだよ!!」

デイノと呼ばれた少年がリーアの顔から目線を外して反論した。

「ふーん。じゃあ今その手に持つてる野菜はなんなの?」

リーアに指を指されてハツとなって二人はすぐさま盗つて来た野菜を後ろに隠した。

「今更隠しても遅いつ!!」

ポカッポカッ

「つてえ!!」

「殴んなバカッ!!」

二人して文句を言った時だった。

「追い付いたぞクソガキ!!」

「うわヤッベ! ファルドのオッサンが来た!!」

「マジで!!」

二人はものすごいスピードで立ち上がると前に走り出したが、

「こらっ!!」

ぱかつ、ぶんっ

「いてえ!!」

「あぶねっ!!」

リーアの繰り出した拳はケンだけを捉えた。

「へっへっ!! 当たらないぜっ!!」

デイノはリーアとファルドを尻目に意気揚々と走り去ろうとしたが、

「きゃっ!!」

前から声がして振り返る時には遅かった。

どーん

「きゃあっ！！」

「うわっ！！」

デイノは前にいた誰かに勢いよくぶつかった。

「つてえな！！今度は誰だよっ！！」

後ろに尻餅を着いたデイノは再び憤慨して怒鳴った。

「はわわっ！ご…、ごめんなさいっ！！」

こちらにも尻餅を着いていたが、すぐに立ち上がると丁寧にお辞儀をした。

「あっ！！エリーじゃない！」

デイノの後方からリーアの声がした。

「リーアさん！お久しぶりです！！」

エリーと呼ばれた少女はリーアと同年代くらいの娘だった。長い髪がしっくり似合っていて、まるで人形のようなだった。

「へえ。おまえら知り合いなんだ。」

デイノが関心しながら立ち上がるとすぐさま後ろから押さえ付けられた。

「さあ捕まえたぞガキ共。今日と言う今日はたっぷりとコキ使ってやる！！」

ファルドおじさんが既に捕まえたケンを抱えてデイノを持ち上げた。

「うわーっ！！鬼ーっ！悪魔ーっ！！」

ケンが悲鳴のように叫んだ。

「なっ！！放せーっ！」

デイノがじたばた暴れたが、大人の力に勝てる訳も無く引きずるように連れて行かれた。

「あきらめ悪い奴らよね……………あ、そうだエリー、今から家に来ない？」

「え、あ、うん。そうする。」

そう言うと二人はゆっくり歩いて行った。

プロローグ2（前書き）

プロローグの2話目です。1ではディノの交遊関係について語られました。この話ではディノの家族について触れます。

プロローグ2

「全くよー、あのジジイどんだけ俺らコキ使えば気が済むんだよ」
やつと重労働から解放されたケンが愚痴を零しながら地面の石を蹴った。

「ほんとほんと。もう俺くたくただよ。つたくよー、野菜ぐらいいいじゃねーかよー」

「そう言う割にお前ピーマンとかニンジンとか嫌いだよな」

「うつつっせ！ーしょーがねーだろ！マズイもんはマズイんだよ！
！ってかお前はどーなんだよー！！」

「あ、俺、家こっちだから。じゃね」

「ああ、うん。じゃあな……って話をこまかしてんじゃねーよ！
おい！逃げんな！ってなんでこついうときだけめっちゃ足速いんだよ！ー！」

結局、ケンには追いつけなくて、ディノは渋々家に帰ることにした。
家に着き、木で出来た開き戸を開けた。

ガチャ、きい……

木の軋む特有の音を立てて開いた。

「母さん、ただいま。」

家の中には刺繍をしながら自分が帰ってきたことを確認した母親がいた。

「おかえりディノ。じゃ、そこに正座。」

「……………はい。」

またか。ディノは抵抗する気も無く静かに指さされた椅子に正座した。

ディノの母、レクサード・マリアは怒る時、つまり説教なのだが、
必ず椅子に正座させて怒るのだ。

「リーアちゃんから聞いたわよ。またファルドおじさんの野菜を盗んだんだってね。」

「……………うん。」

「全く……………デイノはいつもそうね。嫌いなピーマンが出る時は決まって野菜を盗むのよね。」

「……………し、仕方ないだろマズイんだから。」

「だからといって、野菜を盗んでいいなんて言っただ覚えはありませんよデイノ。」

「……………。」

思わず黙ってしまった。

「そんなんじゃないアちゃんと結婚できないわよ。」

「うつうつせ！だっ、誰があいつと結婚するなんて言っただよ！！」顔を真っ赤にしてデイノは怒った。

「あら、母さんはそれでいいのだけど？だってリーアちゃんはしっかりしてるもの。」

顔をニヤニヤさせながらデイノの顔色を伺っていた。

「ま、いいわ。ファルドおじさんにこつてり絞られて来たみたいだから今日はこれくらいにしといてあげる。今度また同じことをしたら、外の畑の草むしりさせるからね。みっちりと。」

「……………はい。」

深々とため息をついてデイノは椅子から飛び降りた。

ガチャ

「ただいまー。」

「おかえりなさい、父さん。」

デイノの父、レクサード・バルハラスはこの村の近くの城、アルバン城に兵士として勤務している。と聞かされている。毎日夕方にはほぼ必ず帰って来る。たまに夜に城に呼ばれることもあるが、よほどの事がない限りはいつも家でデイノの相手をしてくれている。

「お、聞いたぞデイノ。また野菜を盗んだんだってな。」

着ていた兵士用の制服を壁に掛けながら言った。

「……………うん。」

「ハハハッ、よし今日は剣の稽古を厳しくつけてやる。マリア、タ

食は何時ぐらいになりそうだ？」

「そうね……今日は30分くらいで出来るわ。」

「よし、じゃあメリアも呼んで。」

メリアはディノの妹で、まだ8才なのだが、既に家の家事をほとんどこなしてしまうのだ。

「はいはい。メリアーっ!!」

母が上に向かって叫ぶと、ハーンと返事がして、階段からバタバタと音になり、メリアが下りてきた。

「なあに？お母さん。」

可愛い手製のワンピースを着こなしていて、後ろで縛ったポニーテールが更に可愛いらしさを引き立てていた。

「お父さんが剣の稽古をするから着替えてきなさい。」

「はい。わかった。」

返事を軽く返したメリアはその場で服を脱ぎだした。

「じゃ、俺は先に外に行くな。」

「わかった。すぐに行く。」

ディノは棚に置いてあった訓練用の木刀を持ち、外に行くと、いつの間にか外に出た父親がいた。そして、ディノと同じ型の木刀を持っていた。

「来たなディノ。では始めよう。」

「はい。」

「構えっ!!」

バルハラスの掛け声と共に二人は木刀をまっすぐに構え、ひと呼吸置いた。

「……………始めっ!!」

ダンッ!!

父親の声と同時にディノは前に飛び出し、下から一直線に切り上げた。

（当たった!!）

心の中で勝ち誇った。が、大きく空振りした。

「！！！！？」

ディノの父、バルハラスはディノの軌跡を読み、紙一重で左にかわっていた。

「良い踏み込み、良い狙い、良い振り方だ。が、本気で最後まで振り抜かなきゃな、途中で速度が落ちた…ぞっ！！」

「イタツ！！」

父の木刀はディノの腕を確実に捉えた。

ディノが叩かれた痛みで手から木刀を落とした。

「~~~~ったあー！！何も本気で打たなくていいじゃないか！！」
叩かれた腕をさすりながら文句を言った。

「何言つてんだ。お前も本気できただろ。それに今の一撃は手加減してやったぞ。」

ディノが落とした木刀を拾い上げてディノに差し出した時だった。

ガチャツ

「お待たせ。」

ようやく仕度ができたメリアが出てきた。

「おお、来たか。じゃあディノ、メリア。お父さんに二人の打ち合いを見せてくれ。」

「はい、お父さん。」

「っしやー！！負けねーぞ！！」

いつの間にか復活したディノがやる気マンマンで叫んだ。

バルハラスが近くの切り株に座り、あぐらをかいた。

「じゃあ用意……………始めっ！！」

父親の掛け声と共に飛び出したのはやはりディノだった。

先程父親に仕掛けた攻撃と全く同じ攻撃だったが、一つ違うとしたら、今度は全力で最後まで振り抜きにいった。

勿論、反応が遅れたメリアは避け切れずにまともに腹部に直撃した。
「かはっ！！」

めきっ…という骨が軋むような音を残してメリアは上空にすっ飛ば

された。そのまま空中で放り投げられた人形のように無造作に舞った。

すぐさまディノは落下位置まで移動して落ちてくると同時に攻撃を加えようと構えた。

「……………おかしいな…あんなに高く飛ぶなんて……………」

見守っていたバルハラスが不審そうに宙を舞うメリアを見つめていた。

ディノやメリアが使っている木刀は特別、反発性の高いゴムを使っている訳でも無いし、弾性のある木材を使った訳でもない。ただの家を建てた時の木材の余りで作った木刀、要は木の枝なのだ。だからディノぐらいの子供が体重30キロぐらいの女の子を5メートル近く打ち上げるなど物理的に不可能なのだ。だが、事実その現象が目の前で起きているのだ。

「一体どういう訓練をしたんだ……………」

二人の行動を見てみると一瞬、メリアが揺れたような気がした。ここでバルハラスは気付いた。飛ばされたのではなく、自ら跳んだのだと。

だがメリアは、空中で体勢を立て直さずにそのまま落下しているようだった。

「うりゃあつ!!」

ディノが自分の木刀が届く位置にまで落ちてきたメリアにまた全力で木刀をぶん回した。

そして木刀が当たるのと同時に、メリアがディノの視界から消えた。

「えっ!??」

困惑するディノが更なる異変に気付いた。

持っていた木刀が、無い。

左右を慌てて見渡すが勿論メリアも持っていた木刀も、ない。

と、突然、世界が反転した。

地面が上に、空が下になったのだ。

それが自分が仰向けにひっくり返ったとわかるのに時間はかからな

かった。

メリアが自分に馬乗りの状態になって木刀を自分の喉に二本も当てていた。が、ディノはメリアが目の前から消えた事や、一瞬で仰向けに倒された事や、喉元に木刀を突き付けられている事を忘れるくらいメリアの表情に魅入った。

綺麗で、限りなく無に近い無表情。目が鋭く怪しく黄色く光を帯びていて、それを月明かりが更に際立ててより一層、美しさを増していた。

「そこまでっ!!」

バルハラスが叫んだ。メリアは従うように無表情のままディノからどいた。

ディノは仰向けに倒れたまま何も考える事が出来なかった。

「…………ディノ？」

メリアが不思議そうにディノを呼んだ。

呼ばれてからやつと意識を取り戻した。

「なーに呆けてんだディノ。負けたことがそんなにショックだったか？」

バルハラスがにやけながら近寄り、ディノに手を差し延べた。

ディノは差し延べられた手を握ろうとした瞬間、また空振った。バルハラスが手を引いたのだ。

「父さん…………。」

「ん？なんだディノ。」

「茶化すのも大概にしろーっ!!」

ディノがバルハラスの急所を狙って足を振り上げた。

「はっっ!!」

見事に股間に直撃した。

「ほおおおおおっ…………。」

言葉にならない奇声を発しながら、ディノの父はぶざまにゴロゴロと転げ回った。

「ふんっ!!」

体についた土を払いながら立ち上がった。

ガチャッ

家の扉が開いてディノ達の母親マリアが出て来た。

「ご飯出来たわよーっ……………て、あれ？あなたどうしたの？メリア知ってる？」

ゴロゴロと転がる自分の旦那を見ながら不思議そうにメリアに聞いた。返ってきた言葉は一言。

「自業自得。」

だった。

プロローグ2（後書き）

今回はアップするのがとても遅くなりました。待っていた皆さんス
イマセン。（誰も待ってねーよ）こんな出来損ないなこの小説を最
後まで読んでくれる酔狂な方が居てくれたりすると作者的に嬉しい
です。感想や意見を投稿してくれると尚、嬉しいです。皆さんのご
協力をよろしくお願いします。

プロローグ3

「びつくりしたわ。あなたが子供達にたたきのめされたのかと思っ
たわ。」

家に戻ったデイノとメリアとバルハラスは食卓を囲みながらマリア
の作った野菜スープを飲んでいた。

「おいおい、俺はそんなに弱い父親じゃないぞ。」

反論するようにバルハラスは答えた。

「あら、デイノに急所を蹴られて悶えてた人のいうことかしら？」
ぶーっ！！

思わずデイノはスープを吹き出してしまった。

「デイノ！！行儀が悪……てかメリアまで吹き出して笑う事はないだ
ろ！！」

マリアの破壊力のある台詞にデイノは笑いを堪えずにいられなかつ
た。

「むくくく……あ、あの蹴られた時の顔が………ぷっ……ぷぷ……。

」
限界だった。

「ぷっはははっ！！あははははっ！！く、苦しー！！たっ、助けて
！！お、お腹痛い！！ぎゃははははっ！！」

デイノが笑いながら転げ回った。

メリアもそっぽを向いて相当笑いを堪えていた。

「そ、そんなに笑う事はないだろ！！」

赤面しながらバルハラスが言った。

「はいはい。馬鹿笑いは後にして、はいデイノの大好きなカレーよ。
」

「あ、は、はい。」

無理矢理笑いを押さえたデイノとメリアの前にカレーが置かれた。
最後にマリアのカレーが食卓に置かれた。

「じゃ、手を合わせて……………」

全員が両手の平を胸の前で合わせて目をゆっくり閉じた。
バルハラスがゆっくりと語るように言葉を紡ぐ。

「『世界よ………… 我らの住む全世界よ………… 今日この与えて下さった
食事に感謝します………… 恩。』」

「『『恩。』』」

デイノ、メリア、マリアが口を揃えて言った。

「さて、食べようか。」

「はい。」

デイノが軽く返事を返し、全員がカレーを食べ始めた。

「ふーっ、食った食った。」

食事を終えて食器を片付けたデイノは満足そうに自分の腹を軽く叩いた。

「よし、寝る前に勉強の時間だ。マリア頼んだ。」

「人任せにしないでたまにはあなたも手伝いなさい。」

「むう………… わかったよマリア。」

バルハラスは渋々食卓の椅子に座り直した。

「メリア、デイノ紙と筆を持ってきなさい。」

「はい。」

二人は2階に上がり、母親に言われた物をちゃんと持ってきて椅子に座った。

「それじゃあ二人共、今日は『竜』について勉強するわよ。」

マリアが得意げに話始めた。

「まず、『竜』には雄と雌、人という男と女があるのよ。そして『竜』は大半が山に住んでいるとされるわ。まあ、お城や町の中や私たちの村の中には竜を飼っている人もいるでしょうね。その人に聞いていればの話だけれども。」

「そーいやファルドおじさんも昔は飼っていたって言ってた。寿命で死んじゃったって言ってた。」

デイノが淡々と喋った。

「竜の寿命は私たちと同じぐらいか、それ以上って話よ。また中には人語を理解するのもあるそうよ。主食は動物の肉だけど、人は食べたことはないみたい。ちなみに雑食だから果物、野菜を食べて生活している竜も少なからず居るそうよ。」

「あー、お父さんから付け足しておくが、竜の中にはやたら知性が桁外れの奴がいたり、戦闘にやたら特化した奴や、意思の疎通を得意としたりする奴もいるらしくてな、全く同じ竜はこの世に存在しないって言われるくらい、個々にそれぞれ特徴があるらしい。ってどっかの学者が論文をだしていたな。まあ、ほぼ事実と言っていいだろう。時たまに変異種とか言う竜らしからぬ行動をする奴もいるらしい。」

「竜らしからぬ行動?？」

メリアが訝しげに聞いた。

「竜は基本的に山の中に住んでいると言ったが、湖や海とかに住む水竜種と言ったものや、草原や洞窟、砂漠等に住んでいる地竜種、山の頂上付近に住んでいる峰竜種。と種類がいろいろあるが、砂漠や海以外の湖や草原や洞窟やは山の中にもあるから山に住む竜が多めになる。だが変異種は違う。数は少ないが、空に巣くうもの、地底に住むもの、場所を転々と渡りながら生活するものと、行動に統一性が無いんだ。」

「でもさ、地底や空の中には食べるものとか何も無いよ。」

デイノが不思議そうな顔をした。

「それなんだ不明なのは。奴らは何を食べているのかさっぱりわからないんだ。餌を補食しているところを誰も見た事がないらしい。記録もさっぱりだ。いま学者がそのことを必死に研究しているが、まあそう簡単に解るような事とは思えん。」

「…………父さんはその『変異種』を見た事はあるの?」

メリアが聞く。

「一度だけ見た事はある。多分だが、あれは空に住んでいるやつだった。」

「いつ？」

今度はディノが聞いた。

「最近、雨が降っただろ。あの時、父さんの働いているところじゃ嵐だったんだ。雷と雨が凄くてな生きて家に帰れないと思った時だったよ。遠くの雲の切れ間から白くうねっている何かが見えたんだ。よく見ると竜の顔らしきものが見えてな。しかも両目が紅く光っていてな、ヤバイって思ったときだった。急に降りたと思ったらものすごい咆哮が響いて空に昇って行ったんだ。うん、さすがの父さんもあれにはビビったね。と、まあ今日はこれくらいにして寝なさい。」

「はい。」

「ええーっ！もうちょっと聞きたかったよーっ！」

「はいはい、もう寝ましょうね。」

駄々をこねるディノをあしらうようにマリアは2階に二人を連れていった。

一人残されたバルハラスは水時計を見て呟いた。

「……9時か……。」

椅子に振り返ると椅子から軋む音がした。

「……………」

「何考え込んでるの？」

マリアが2階から降りてきた。子供が寝たのを確認したようだ。ゆっくりと椅子に座りバルハラスと向かい合った。

「ん？ああ。二人の戦いかたをだ、な……………」

「ふーん。どうだったの？」

「ああ。ディノは秀才だよ。剣術を初めて一週間でしっかりと振るえるようになっていた。ちょっと慢心があるがな。だがまあ訓練をもっと積みば相当強くなる。」

「……………メリアは？」

バルハラスは急に顔を曇らせ、一拍おいてから答えた。

「メリアは……………あいつは……………天才だよ。」

メリアはふっと目を伏せ、うなだれた。構わずバルハラスは更に続けた。

「いや彼女は天才の上を行くかな。……………敢えて言うとするなら『神才』かな。……………ディノの剣術を1回見ただけで俺の教えようとしていた剣術を完璧に覚えていた。初めてからたった1日でな。…今日はディノに教えていた剣術に自己流を加えてディノをいとも容易く打ち負かしていた。」

「……………」

「……………」

少しの間沈黙し、

「「はあ。」」

二人は同時にため息をついた。

「なんでそうなっちゃったのかしら……………」

メリアが2階を見つめてからまた、ため息をついた。

「まあ、なんせ俺達の子供だよ。強くて当たり前だよ。」

「……………メリアには普通の人生を歩んで欲しいわ。普通に好きな人を作って普通に結婚して普通に長生きしてくれれば…、欲を言えば何処かの国の王子様の結婚相手になってもいいわね。」

「そんなに上手くいくかね。」

バルハラスの意見に即答した。

「いくわよ。」

「どうして？」

そして今度は胸をはるようにして誇らしげに答えた。

「メリアは私に似て美人なもの。」

プロローグ3（後書き）

続きます。まだまだ続きます
プロローグなのに無駄に長え（^^；
これからも頑張ります

プロローグ4（前書き）

あれ……気付いたらもうプロローグが4話目だ……（……）

プロローグ 4

.....
はあ..... はあ..... はあ.....

暗い森を少女は疾走していた。闇に紛れるように、見つからないように。

はあ..... はあ..... はあ..... つ~~~~!!

すぐ後ろには紅く光るものが二つ宙に浮いていて疾風のように右に左に動いていた。あまりの早さに、紅い光が筋を残して、さながら影分身のようだった。

そしてそれがあまりに不可解で恐ろしく悲鳴もあげられずにただがむしゃらに逃げていた。

グアアアアアッ!!

光の主が咆哮して一気に躍動した。
すると少女は急に前のめりに転んだ。

逃げなきゃ..... 逃げなきゃ.....

すぐに立ち上がろうと手足に力を入れ、転がるようにまた前に走りだした。前方に微かに見えた白い光に向かって。

「私に似て美人だもの。」

マリアが胸を張って堂々と宣言した時だった。

グアアアアアッ！！

急に咆哮が轟き、家全体がビリビリと震えた。

「！！！！」

「！！！！」

二人が硬直して顔つきが変わる。

跳ね起きたのか、二階からドタバタと騒がしくディノとメリアが降りてきた。

「父さん！今の何！？」

ディノが血相を変えて慌てる。

「二人ともここから出るなっ！！」

必死の形相でバルハラスが叫んだ。

「マリアっ！二人を頼む！」

「わかってる！！」

バルハラスは瞬時に戸の傍らに立て掛けてあった両刃の剣を鞘から抜き放ち乱暴に戸を開けて飛び出した。

「父さんっ！！」

ディノが追おうとしたが、マリアが即座に止めた。

「ディノっ！！出ていってダメッ！！危な過ぎる！！」

「母さん！？止めないでよ！！」

マリアの制止を振り切ろうと手足をバタつかせた。

「あなた一人が行った所でなんにもならないのよ！！」

「関係ないよ！！行ってみなければわかんないじゃんか！！」

「ディノ！！」

と、急にメリアが木刀を持って外に飛び出そうとした。

「！？メリアっ！！！！」

慌ててメリアを止めに行った時だった。ディノがマリアの制止を振

り切り窓を開けて飛び出してしまった。

「あつ！！」

マリアが慌ててディノの方を向いたが対応しきれず、更にはその一瞬の隙についてメリアも飛び出してしまった。

「ああん！もうっ！！」

とうとうマリアも戸の傍らに置いてあつた両刃の剣と、火の灯つていたランプを持ち暗闇の中に飛び出して行った。外に出ると辺りは月明かりが無い黒一色の暗闇だった。持ち出したランプでは全くと言っていいほど役にたっていないかった。

森の奥の方であちこちに飛び回る二つの紅い点が異様に不気味に見えた。

「あなたっ！！」

マリアが暗闇に向かって叫ぶ。

「マリア！？ディノ達はどうした！！」

暗闇からバルハラスの声が返ってきた。

「二人ともあなたを追って飛び出したの！！ごめんなさい！！私の不注意なの！！」

「……………そう言っても何も変わらん！！出てきてしまったのなら仕方ない！！ディノ！！メリア！！お母さんから離れるんじゃないぞ！！」

「「はいっ！！」」

また暗闇から声が返ってきたが、前からではなく後ろからだった。

「ディノ！？メリア！？？」

振り向くと二人が鋭い目付きで森の奥を睨んでいた。

「マリアっ！！こっちに来てくれ！！」

今度はバルハラスが大声で叫んだ。

急いで声のした方向に走っていくとバルハラスが10歳くらいの少女を抱えていた。

「追われて逃げてきたらしい！！とりあえず頼んだ！」

放り投げるようにマリアに手渡すと持っていた両刃をしっかり両手

で持ち直した。

「あなたっ！！」

マリアが危険を感じて叫んだ。バルハラスのすぐ近くまで紅い両目が迫っていたのだ。

「ちいっ！！」

咄嗟に反応したバルハラスは剣を自分の真上に向けて振った。

ズい、と何かが擦れる音がした。

「マリアあ！！離れろおっ！！こいつはその子供を狙っている！！」
動物的な異臭がすぐ近くあると感じ取れた。

「あああっ！！」

バルハラスが何かを押し返した。すると一気に先ほどの異臭が遠ざかった。

「……………っ！！」

マリアは家に向かって走りだすと同時に手に持っていたランプを地面に叩きつけた。

ランプの中には、すぐ燃やせるように気化が早い液状の油と、長く火を灯していられるように固形の油も使っていた。つまりは、何かを燃やすにはちょうどよい材料が揃っているのだ。

ガラスが割れる音が響き、一気に火が草木に燃え広がった。

炎によって辺りが明るく照らされた。

映し出されたのは、竜。

全身の鱗が炎の明かりが反射して鮮やかな黒色に彩られ、翼が火傷からか醜く縮み、鋭い爪が地に深く刺さりその不安定な四肢を支えていた。

異常だったのが両目が真っ赤に染まり、かなり荒々しい呼吸を繰り返していた。

だがそれ以上に異常だったのが口元。血だらけで、竜の奥歯に人の腕らしきものが力なくただブランとぶら下がっていたのだ。

何かに引っ掛かっているのか、それとも何かが引っ掛かったのか。
いずれにせよ、竜が人を食った可能性があるのだ。

「こいつぁ……参ったな……変異種で最近出るようになった異常な奴だよ……ついてないな……あつ!!」

バルハラスは両刃の剣を大上段に構えて竜との間合いを一気に詰めて降り下ろした。狙いは竜の頭。

ザンツ!!

(殺った!!)

はずだった。相手が無抵抗であつたなら。

竜はバルハラスの一撃を尻尾で受け、左の前足で殴るように突き出した。

明らかな死角からの不意討ち。

なのに、バルハラスは瞬時に右足を前に出し、竜の前足を踏み台にして跳んだ。

更に跳ぶと同時に竜の尻尾を両刃の剣で切り落とし、竜の背に降り立ち、間髪入れずに額に確実にぶっ刺した。

「グルアオオオオッ!!」

断末魔らしき悲鳴をあげて竜は力なく地に伏せた。

「よっ……と。」

ふわり、と地面にバルハラスは着地し、勝利のポーズをとろうとした時だった。

バシャアッ

何かの液体……いや、大量の水である。かけた人。いや人達は木で造られた桶を両手で持っていた。

「……。」

「……。」

「……。」

「……デイノ。メリア。それからマリア。火を消すことは良いんだが、なぜ俺にまでかけた……?」

「念のため。」

ディノが答え、

「一応。」

メリアが答え、

「嫌がらせ。」

メリアが答えた。

「うん。メリア、なんか俺に恨みでも?？」

「だって……水に濡れてるあなた、凄くカッコいいんだもの。」
顔を少し赤らめて言った。

「……………」

「……………」(さすがに無理があつたかな…?)

「メリア……………」

「はい……………」

「可愛いから許す!!」

「そつ、そんな恥ずかしいですよあなた!!もつ、そうことを言うのは子供が寝てからにしてくださいよ!!」

メリアが顔を真っ赤にしてバルハラスから目を背けるように後ろを向いてしまった。

その時ディノは思った。

(……………イチヤイチヤすんなこのバカップルがあつ!!)と。

「ん?話は変わるけど、メリアさっきの子は?」

「あ、ああ。家の二階で寝かせてますよ。」

「……………なら大丈夫だな。ディノ、メリア、今日はもう寝た寝た。あ、ディノは床で寝な。」

バルハラスは手で二人に寝るように合図をした。

「はい。」

「はい……………ってなんで俺が床で寝なきゃいけないんだ!!」

「ええッ!?前々から床で寝たいって言っていたじゃん!!」

「言つかーっ!!」

ディノは決めた。いつかこのバカ親父の平和そうな顔をブン殴るとするとマリアが横から口出した。

「でも、ディノのベッドで女の子が寝てるから、一緒に寝ることになるわよ。つまり………添い寝??それとも妹と添い寝する??」

「ぶっ!!」

吹き出してしまった。

「私は別に気にしないよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんが一緒に寝たいって言うなら構わないし、それとも私が床で寝る?」

特に気にしないと言った様子で淡々とメリアは言った。

「い、いやいや!!メリアが床で寝る必要はないよ!!」

「じゃあ一緒に寝る?」

メリアは相変わらず気にしない様子で言った。

「はははっ!!ディノそうしてもらえ。」

バルハラスがちゃかすようにニタニタ笑いながら言った。

「¥ \$ □ % 。 っ!!」

ディノは顔を真っ赤にして言葉にならないような勢いで憤慨し、

「ゆっ、床で寝るっ!!」

それだけ言った後、全速力で家に入ってしまった。

「あらら…つれないなあ。」

バルハラスがつまらなそうに呟く。

「あなたが茶化すからでしょ。………ま、メリア。今日はもう寝なさい。」

「はい。」

メリアはゆっくりと家に帰っていった。

「………」

「…はあ。やっぱり血、ね………」

「…あ、説教すんの忘れた。」

「忘れましょ。もう私は寝るわ………」

「あゝあ………明日は緊急会議だよ………」

バルハラスは気だるそうに家に帰っていった。メリアも続くように

帰っていった。

プロローグ4（後書き）

はい、プロローグ4終了です。まあ言いたいことは大体わかります。プロローグのくせに無駄に長え!!!

いや、作者もびっくりしているんです。まさかプロローグがこんなに長くなるとは……

実際、一番最初の竜は変異種を出すつもりじゃなくて、通常種の空を飛んでいる竜を先に出す予定だったんですが、予定は予定でした（ハハハ；）

え？ならさつさと飛ばせって？

いやいやとても重要なんですよ！ドラ。エVのパ。スとか、ナ。トの四代目。影ぐらい重要なんですよ！！

………失礼しました。とりあえずとても重要なんです。長い長い目で見守ってください。

プロローグ5（前書き）

ああ………プロローグ5で終わりにしようと思ったんですが………
出来ませんでした（泣）

プロローグ5

（翌朝）

「おはよう。お母さん。」

一番最初に起きたメリアが二階から降りてきた。

「おはようメリア。昨日はよく眠れた？」

メリアの母、レクサード・メリアは朝食を作りながらにこやかに返事を返す。

「うん。」

「デイノと一緒に寝たの？」

「ううん。『床で寝るっ！』って言って寝ちゃった。」

「くすッ…デイノらしいわね…………。」

軽く笑ってから作りたてのオニオンスープを食卓の上に置いた。

「うん。お兄ちゃんらしい…………あれ？お父さんは？」

「昨日の事で報告しなきゃって言って今朝早くからお城に行ったわ。」

「

メリアが忙しそうに包丁を動かす。野菜を切る音が刻みよく響く。

「それより『あの子』は？」

「それが…眠ったまま起きないの…………。」

残念そうにうつむく。

「まあ、当たり前ね。あんな目にあってケロッと起きれる方がおかしいからね。」

「そうね…………。」

「あ、それよりデイノを起こしてきて。」

「はい。」

たたつ、と軽く階段をかけ上がって行った。

「さて、今朝のご飯でーきたつと。」

コンコンッ

家の扉を叩く音がした。

「？はい。」

マリアはすぐさま戸に近づいて開けた。

戸の外には木こりの服装をした二人組の男が立っていた。一人は帽子を被り、もう一人は何も被っていないくて短髪の男だった。

そして、帽子の男が、持っていた斧をいきなり振りかぶり、マリアめがけて降り下ろした。

「！！？」

バキッ！！

家の木がえぐれる音がしたな

。ただそれだけマリアは思った。

一気に姿勢を低くして前に飛び出し、手のひらを斧の柄にめがけて高速で繰り出した。

降り下ろしている最中だった斧は最も威力があるはずの鉄の部分が男達の遥か後方に綺麗な弧を描いて飛んでいった。

残った箇所は先端が割れた、ただの棒切れのみ。

マリアという人間はたった一撃で『斧』という使い方によれば人を一瞬で殺せる武器をとて簡単に破壊したのだ。

「！！！」

「あ、驚いてる？……クスッ、私を殺しに来るなんて、あの王様はよっぽど心に傷でも負ったの??」

意地悪そうに笑ってから今度は体をバネのようにして右手で拳骨を顔面に喰らわせた。

「ぶげっ！！」

ごんっ、と盛大な音を立てて帽子の男が1〜2メートル程吹き飛ぶ。

「あゝ、やっぱり拳骨は痛いわね。骨にヒビ入ったかも。」

赤くなった右手をヒラヒラと振って、短髪の男を睨む。

「まだ続ける？」

男は恐怖に満ちた顔つきでマリアを見つめていた。

「う、うわあああああっ！！！」

腰に帯刀していた小刀を抜き放ちマリアに突進するように刺しにいった。

「はあ……………帰ってくれたら楽だったのに……………」

マリアはそうぼやいてから小刀を左手で掴み、へし折った。

至極当たり前のように。

また、折ると同時に右足を振り上げて男の延髄を蹴り抜いた。

「かつ……………」

男はその場に崩れ落ち、気を失った。

「はあ…、またやつちゃった……………。難しいわね、気を失わせないようにしつつ、戦闘不能にする首蹴りは……………もうこれで28回目なのに全く上手くない。」

左手から血をポタポタと流しながら自嘲した。

「まあ、いつか。聞きたい事はいろいろあるからどつかに縛りつけておきましょう。」

外に殴り飛ばした帽子の男を引きずって家の中に入れた時だった。デイノが二階からメリアと一緒に降りてきた。

「母さん！なんかスツゲエ音が聞こえ……………誰その人。」

「ん？デイノ。朝起きたらなんて言うの？」

「あ、おはよう母さん。ってそれより、その人は誰？」

「あ、デイノ。その縄取って。」

「はい。」

棚に掛けてあった縄を手早く取るとマリアに手渡した。

「えっと、ここをこうして……………こうで……………よし完璧。」

二人の男の両手と両足を縛り、動かないようにさせて、さらに足と手をつけるように結んだ。

「……………で、母さん。その人は誰？」

「知らない。」

「……………えっ??」

「うん、知らない人よ。」

「で、でも、え？母さん手から血が出てる！！」

ディノがびっくりしたように言った。

「今さら？…大丈夫よ。死ぬわけないんだから。」

とても軽く受け答えした。

「そういう問題じゃなくて、なんで怪我してるの！？」

「斬られたから。」

一言。そう言うってからへし折った小刀を拾ってディノに放り投げた。
「っわあ！！」

驚いて後ろに身を引いた。小刀はコトンと音を立てて床に落ちた。
もちろん刀身は砕けていた。

「さ、朝ごはんにしましょ！」

とても元気な声で高らかに言った。

.....

燃えている。

家が、村が、木が、森が、動物が、人が、

『逃げて！』

駄目、私はどこに行っても同じ.....

『早く！ここから逃げなさい！』

駄目なの、私がいたら次の村もその次の村もこうなるの.....。

『逃げなさいっ！！』

嫌、あなたを置いていけない.....

『私が、あいつを引き付けていられる間に逃げなさい！！そして必ず生きなさい！！』

嫌よ、嫌、嫌、嫌、嫌やああ！！

.....嫌だったのに.....駄目だったのに.....気付けば後ろを向いて走っていた。怖くて.....、怖くて.....、仕方なかった。

グオオオオオッ！！

あいつの咆哮が響く。

『生きて下さい……………姫サマ……………』
それが最期の言葉だった。

私は夢から覚めた。

天井が見える。

どうも布団の中に居るようだった。

床には毛布が無造作に置かれていて、もうひとつベッドが置かれていた。

そしてゆっくりとゆっくりと昨日のことを思い出す。

ゾクッ

全身が総毛立つ。

「ひっ……………！！」

目が二つ真っ赤に燃えた怪物が……………！！

「……………。」

（いない……………？ここは……………どこ？？）

自分の寝ていたベッドから起き上がると、自分が可愛い寝間着を着ている事に気づいた。

「……………？」

壁には自分が着ていたみすばらしい布の服が掛けてあった。その真下には自分が持っていたであろう持ち物も置いてあった。一応、確認してみる。

（間違いない……………。）

自分の物だと確認した。また、ひとつも盗られていなかった。
窓の外を見ると自分のいる位置が高い事がわかった。

（多分2階ぐらいかな。）

服を着替えて持ち物を全てポケット等にしまい、首にかけてあるネックレスを確認し……………

（……無い!!）

首に手をあててから気づいて慌て辺りを探す。と言ってもベッドの下や隣のベッドと床の毛布ぐらいしか探す所はなかった。無論どこにも無い。

（そん な っ ……………!!）

愕然とする。

立ち尽くしていると、下から音が聞こえる。

あまり大きい音ではないのでよく聴こえない。辺りを見渡すと当然のように開き戸があった。

（どう……………する……………）

自然と足が前に進む。

一歩、また一歩と。

（……………そうだ。取り戻さなきゃ……………。）

ノブに手をかける。

（あれは……………とってもとっても大事な物だから!!）
ノブを回して扉を開けた。

ガチャ

「ん、どうやらお目覚めのようね。」

トンツトンツ、とゆっくり階段を降りてきている音がした。
顔が見えた。

綺麗。その言葉以外何もいらなかった。瞳は青色。髪は金髪でまだあどけなさが残る幼い顔だが、大人になっても綺麗なままだろうと思える。

が――、

その娘はメリアにゆつくりと、しかし、無駄の無い動きで接近すると、どこからか取り出した小刀ナイフを喉元に当てた。そして拘束するようにメリアの腕の関節を極めた。

「動くなっ!!」

一気にその場が緊張し……………ない。

「はあ……………今日は朝から面倒ね……………」

メリアが豪快にため息をつく。

「母さん、スープお代わり。」

「私も。」

「ハイハイ。順番ね。」

「黙れっ!!動くなっ!!全員その場で止まれっ!!」

全員に牽制をする。

「お前達!!こいつがどうなってもいいのか!!」

「あ、そうだ忘れてた。あなたの分もあるわよ。さ、食べなさい。」

メリアは全く緊張感の欠片も無い声で朝食を食べるように促した。

「黙れっ!!いい加減にしないとこいつの首を切る!!」

「誰の首を切るって?」

デイノがとても面白そうに笑う。

「っ!!……………お前…今の状況を理解しているのか?」

手に持った小刀に力を入れようとして、気づいた。

刀身がへし折られている事に。

「なっ……………!??」

ただただ驚いた。自分より幼い少女が刀を折り曲げたのだ。

「そろそろその関節極め外してくれない?」「あっ……………は、はいっ!!」

メリアの勢いに押されて素直に腕を離してしまった。

「ありがとう。わりと素直なのね。」

クスッと笑ってから再び置かれたオニオンスープを口に運んだ。

「ふーっ!!食った食った。」

デイノは食べ終わったパンを乗つけていた皿を片付けてから、縛り

上げてある男たちの近くに寄っていった。

「いい加減話してくれよお前ら。寝たふりしてんのバレバレだぜ。」
返事をしたのは全く別の人だった。

「待て………そいつらは………!!」

先程までメリアに小刀を当てていた娘が短髪の男に近づいた。
そして、がつ、という鈍い音がした。

「貴様らっ………!! 言えっ!! 何のために私の父を殺した!! 何のためにっ!!」

がつ、がつ、と2度3度ブン殴り襟首を掴んで締めた。

「貴様ら………事と次第によっては許さぬぞっ!!」

わなわなと肩を震わせて怒り狂っていた。

「………お、おっ、幼き王女が、生意気なっ!! わっ、我らは、『コギク』!!、貴様らのような王政には屈せぬものだっ!!」
初めて男が喋った。

「なっ………!? ……我が父を侮辱すると許さぬぞっ!!」

王女と呼ばれた少女は再び男をブン殴った。

それを見てメリアが動いた。

「放しなさい。貴女のようなお方がこのような人間を相手にしてはいけない。」

急にメリアが敬語になってその娘を諭すように腕に手を置いた。

「しっ、しかし………!!」

「それとも王女は自国の民であろうと叛く者は許せぬと……?」

「っ!! ……くっ!!」

下唇を噛み、掴んでいた男の襟首を放した。

「………よく我慢なされた。王女様。いえブリューク王国第2王女
デイハ・ナクタ・サラ殿下!」

「!! なぜ………その名を………? その名は私の側近と王族しか知らないはず!」

「私がレクサード・メリアだからですよ。」

につこりと微笑んでその娘。いや、サラ王女を見た。

と、その時デイノは思っていた。

(……………それ答えになってねえ!!)

マリアはそつとサラを抱き寄せる。

「大変だったでしょう……………。大人に騙されて、何もかも信じられなくなつて……………私達みたいな家族にも騙されたでしょう……………」

「……な、なぜ……………それを……………!?!」

「貴女が2階から降りてきた時の顔は怯えきつていて、さつさこの場から立ち去りたいと思つていた……………。貴女のしていたネツクレスは今ここで渡します。」

マリアはおもむろにサラの服の背中 of 辺りに手を持つていつて器用に布を一枚薄く破いた。

ちやり……………と小さな音がしてネツクレスが零れ落ちマリアの手に収まつた。それをゆつくりと丁寧にサラに着けた。

「………。これじゃあ……………まるで……………私が一人騒いでいただけじゃないか……………」

ふるふると体を小刻みに震わせていた。先程と違つて怒りは全く感じられなかつた。

「それで良いですよ。サラ……………だつて貴女は……………何でも一人で背負いこんでしまいますから……………それが貴女のいいところでもあるんですが、少しくらいに他の人にも背負わせて下さい……………だつて貴女は一国の王女であると共に普通の女の子なんですから。誰にだつて相談してもいいし、協力を頼んで良いですよ。だから、私達を頼つて下さい。」

それはサラにはとても優しく響く言葉だつた。

「……………う……………う……………うわああああああん!!うわああああああつ!!」

サラ王女。いや……………サラはマリアに抱き着いて本気で泣いていた。張りつめていた糸を切つたように、何度も何度も嗚咽を繰り返して

泣きに泣いていた。

マリアはサラが落ち着くまでただ抱きしめて頭を優しく撫でていた。何度も何度も……。繰り返し繰り返し……。。

「先程の無礼を詫びたい。本当に失礼した。」

サラはメリアに本気で頭を下げていた。

「いいわ、全然気にし……」

「駄目だ。」

横からデイノが口を挟んだ。

「……っ！……私が責任をとって所望する物を……」

サラが少し怒りを堪えながら言おうとしたが、

「駄目だ。」

またデイノに遮られた。

「っ！……今回の無礼を……」

「だーめだ。」

とうとう切れた。

「じゃあどうしろと言っただ、お前はっ！……私に何を望むのだった……」

サラが起こったのに対し、デイノは飄々として、軽く、ごく普通に答える。

「うーん……。なんっーか……。『堅い』んだよ。そんな『全責任を……』とか、『無礼を……』とか要らないんだよ。謝りたいなら、率直に、相手の眼を見て『すいません』とか、『ごめんなさい』だろ。俺はそう教わったぜ！」

偉そうに堂々と言った。

サラは一瞬何を言っているのか解らず呆けていた。そして少し考えて、理解した。

「……そう……だな……。」

ふっ、と笑い、メリアを真っ直ぐ見つめて真顔になって頭を下げて

はつきりと言った。

「すいませんでしたっ!!」

「……………80点!!」

ディノが大声で言った。

「は!？」

サラがすつとんきょうな声を上げた。

「今度は『ごめんなさい』や『すいません』がちゃんとと言えるように!!」

ディノがまた偉そうに言う。

「??」

訳がわからないと言うようにサラはマリアを見ると、笑っていた。

「ぷっ……、あははははッ!!ディノ!!いつからそんな言葉教えられたんだっ!!」

とても可笑しそうに腹を抱えて笑っていた。

メリアもとても可笑しそうに笑っていた。

「?、??。どういう事だ??」

マリアが笑いながら答える。

「あははッ、ディ、ディノはね、あなたに教えようとしているのよ。」

「何をだ?」「他人行儀じゃなくて、家族みたいに、もっと楽しんでもいいって。気が抜ける場所くらい誰にでも必要でしょ。」

「!!……………そう、か。……………フッ……………皮肉なものだ……………」

城での作法は分かってても、私はこういう時、こういう言葉を、どういう顔を、どういう事をすれば良いのかわからんだ……………」

サラが哀しそうに言う。

「いいのよそれで。あなたは、あなた。それ以外にどんな理由がいるの?」

マリアが楽しそうに笑う。

「さつ、サラ。朝食を食べなさい。」
「…わかった。」

サラは迷わず食卓に向かった。

朝食を食べ終えたサラは、ディノとメリアに連れられてディノの悪友、ケンに会いに行った。

「おーい、ケーン！！遊ぼーぜ！！」

ケンの家に向かって大声で叫んだ。

「おーう！！今いくー！！」

返事がしてから数秒でケンが家から出てきた。

「オッスーッ！！で、今日は何する？」「んじゃあ今日は『マクナ』を探そうぜ！！」

「つしゃー！！行こうぜ！」

二人はさつさと走っていつてしまった。

サラは後を追いながらメリアに聞く。

「なあ『マクナ』とはなんだ？」

「『マクナ』は森にいる地竜種で、温厚な性格の竜。見つけるのが簡単な竜。両手と両足の4本足で立ち、爪や牙は退化しているから気をつければ危険は無い。主に草や木の実を食べていて、翼は生えて無く、集団で必要以上に動かない竜。」

「すごいなメリア。そんなに暗記しているなんて。」

サラが素直に感心した。

「毎日のように母さんから教えられていたから。」

メリアは素っ気なく返した。

ディノとケンを追いながらサラはメリアからいろいろな竜の事について詳しく解説をもらった。

「……………」

「じゃ、よろしくね。」

「わかりました。では預からせてもらいます。」

デイノの家ではマリアが城の警備隊に縛り上げてあった二人を引き渡していた。

きちつと敬礼をした若い男の警備員はバルハラスの後輩にあたる人物で、マリアとも仲が良かった。

「気をつけてね。彼らはかなりの手練れだから。」

「了解です。人数を増やして護送します。」

「ん。…あ、そうそう、私の夫に今すぐ帰って来るように伝えて。」

「バルハラスさんにですか……？」

「そ。」

「………はい。…わかりました……。」

そう言つて縛り上げた二人の男を外にいる仲間と共に連れて行つた。一人残つたマリアは近くにいて聞こえるか聞こえないかぐらいの声で呟いた。

「………『竜の怒り、その身に刻み付けよ』か………。」

追い付いたサラは驚いた。

「だはははははっ！！」

「ぎやはははははははっ！！」

ガオオオオオツ！！

「なあメリア。あの竜は温厚ではないのか？」

「いえ、とても温厚。」

「じゃあなぜ二人は追われているのだ？」

「あの竜の子供を追い回したから。」

メリアがスツ、と指を指した先には疲れ果ててぐったりとしたマクナの子竜が横たわっていた。「優しく接すれば襲わない。」

メリアはそう言つと子竜に近づいていった。

キュウウウッ

子竜が身の危険を察知して嘶く。

子供の嘶きを聞いて親のマクナがメリアに向かって向きを変えた。

グオアアアアアッ！！

「近寄るな」と言わんばかりの威嚇をするが、メリアはそれを無視してマクナに近づく。

「大丈夫よ……。私はあなたに危害は加えない……。」「
一言。メリアがそう言つと子竜は急に静かになった。それどころか自ら寄つていった。

キュウ

「いい子……。」「

メリアは優しくマクナの頭を撫でた。

マクナの親竜もその様子を見て安心したようだった。

「……うっし、んじゃあ次行こうぜ！！」「

ケンがメリアの行動を見て開き直ったように言った。

「んじゃあ次は何処に行く……」

「リーアさんの家。」「

メリアが即座に言った。

「今日は何処でも連れていってくれるんですね。」「

「うっ……。」「

「ま、マジ……？」「

ケンとディノの顔がひきつって、とても嫌そうな顔をしていた。

プロローグ5（後書き）

読んでくれた人。本当にありがとうございます。

一つだけ……

俺はもう何も考えない！！書きたいことだけ書いてやる！！（開き直り）

プロローグ6（前書き）

いつになったら始まんのかな………本編。

プロローグ 6

「リアの家」

「こんにちは。」

「あ、メリアちゃん！いらっしやい。あ、ディノやケンまで……」

「……そちらは……誰？」

リアが家の戸を開けながら聞く。

「ん？そっぴやお前、誰？」

ケンも今さらになつてから聞いた。

「私はブリューク王し……むがっ！？」

慌ててディノが口を塞ぐ。

「あーっ！！なんだあれはーっ！??」

そしてあさつての方向を指差して、全員が向いている間にサラを皆から遠ざけた。

（身分を言わせないようにつて母さんが言つてたから、今から俺の言つた通りに言えよ！！）

（なぜだっ！！?）

（知らないけど、なんか大騒ぎになるつてさ！！）

（ぬうつ……し、仕方ない！で、なんと言えば良いのだ??）

（『私はブリュークの町から来た王族の娘です！！』）

（お兄ちゃん。それじゃ同じだよ。）

ひよこつと現れたメリアがディノとサラの間にいた。

（どわあっ！！め、メリア!??）

（私が言うからサラは喋らないで口だけ動かして。）

（わ、わかった。）

「あのさ……ディノ……。」

リアがやれやれといった感じでこちらを見ていた。

「ん？なんだリア。」

「おせっかいかも知れないんだけどさ、ちゃんと前もって話し合っ

てから来たなら？」

「そうだよディノ。『会議してから戦闘だ』ってうちの親も言った。」

ケンが偉そうに言った。

「それ……うちの父さんの言葉じゃん……………」

リーアが白けた目でケンを睨んだ。

「あ、エリーだ。おいエリーっ!!」

「そこで無視かよっ！」

たまらずディノがツツコんだ。

……………

「……………雲の流れが変わった……………雨でも降るかな……………」

空を見ながらマリアが呟いた。

「……………つと、いけないいけない……………」

そう言つと机に置いた凶悪な曲線をした刀を丁寧に手入れを始めた。刃に映る紋様が妖しく輝くそれは、東の国の物を伝来したものであった。

その傍らには数本の刀が無造作に置かれていて、既に手入れをし終えていた。

「……我が御霊、汝に捧げし時、天よりまかり通らん。……さて、どういう意味かしら……………。空から竜でも降つて来たりとかだったりして……………」

そんな独り言を言いながらマリアは手入れを続けた。

……………

「リーアの家」

「へえ、エリーこれから引越すのか。」

ケンが能天気に行った。

エリーを見つけた後、全員リーアの家に入れてもらい、ゆつくりと菓子でも食べながら話そうとケンが勝手に決めてしまい、やむなくそうしたため、今、ディノ達はリーアの家の中にいる。

「すつごく軽く言ってるけどさもう二度と会えないかも知れないん

だよ。」

リーアが寂しそうに言う。

「大丈夫大丈夫。死ぬ訳じゃ無いんだから。」

「そーゆー問題じゃないっ！」

「あははははっ！ーリーアはやっさしいね。」

「ケンっ！ー茶化さないでっ！ー！」

リーアが眼に涙を貯めながら言った。

「ケンは寂しくないの……？エリーがどっかに行っちゃうんだよ……？」

「リーア泣かないで……。すぐに行くわけじゃないから。」

慰めるようにエリーが言う。

「そうそう。」

ケンが頷く。

「でさ、何処に引越すんだ？」

デイノが聞いた。

「えつと確か……『アルバンの城下町』。」

「……へっ？」

全員の動きがピタッと止まる。

「だから『アルバンの城下町』。」

「『ええええーっ！ー近っ』」

デイノとケンがハモる。

「アルバン城とか私の家から少し歩けば着くじゃんっ！ー！」

リーアが大声を出して言う。

「ここからも見えるな。」

サラが窓の外を見て言った。

「……ごめんなさいエリー。てっきりもう二度と会えないのかと

……。」

「リーア……気にしないで。心配してくれてありがとう。」

「な、だから言ったろ。……で、お前、誰？」

相変わらず無頓着にケンがサラを見て聞く。

「あ、ああ。」（チラッ）

サラはさりげなくメリアに目配せをしてから口パクで喋り始めた。
(メリア) 『私はブリュークの城の行商人の娘でサラと言う。今、よくこの村に仕入れに来ている。今はアルバン城に売り出しに行っていて知り合いのディノの家に預けられている。今後ともよろしく頼む。』

(……………だ、大丈夫なのか？こんなので……………。)

サラは心の中で不安になったが、

「へえー。そうなのか!？」

ケンが声を張り上げる。

「じゃあエリーは今度お世話になるかもね。」

リーアがエリーと顔を見合わせる。

「マジでか!?? そうなのか!??」

素性を知っているディノまで騙されていた。

(え、ええええーっ!??)

サラは慌ててメリアの方を見ると、とても満足そうに煎れてあったお茶を優雅に飲んでいた。

「………そ、そうだと。本当だぞ、ディノ。」

「で、でも城のだい…ぐほっ!」

「王女」と言う前にメリアがディノの腹部に目に見えないくらい超高速の肘うちを入れた。もちろんお茶は一滴も溢さずに。喰らったディノは悶絶して転げ回った。

「ディ、ディノ? どうしたの??」

リーアが心配して聞く。

「さあ。わからない。」

メリアが答えたが、やはり優雅にお茶を飲んでいた。

プロローグ6（後書き）

はい。プロローグ6でした。

読んでくれた皆さんありがとうございます。感想を一言でも書いてくれたらなお、感謝感激です。

……言いたかったです。

最近ユニークユーザーが増えていました。Σ（。。（；）

こんな出来損ない（本当に出来損ないですが）の作品を読んでくれて、面白いと思っていていたらとても嬉しいです。

いつ本編入れんのかな……。。

これでプロローグよりつまんなかったらヤバイよなあ……。――；

）

プロローグ7（前書き）

プロローグが終盤になって参りました！！

.....やっとかよ.....。

プロローグ7

「夕方」

結局、半日近くリーアの家でディノ達は過ごした。と、いつてもディノは主に勉強をさせられていた。

「ディ、ディノ……………い、生きてるか……………」

「あ、ああ。……………くそっ。リーアの奴……………数の計算なんかわかんねーよっ!!」

「奇遇だな……………俺もだ。」

やらされた問題は数字の足し算から始まり、わり算までやらされたのだ。

「……………よしっ!もー帰っていいわよ。」

リーアがパンつと手を叩いて終了を宣言した。

「っしやー!!ケン帰ろーぜ!!」

「わーい!!」

二人は使った紙や鉛筆やらを高速で片付けて荷仕度をし、さっさと家を飛び出していった。

「……………逃げることに關しては一品ね……………」

リーアが呆れたように言った。

「でもそれがあの二人らしいんだよね。」

エリーが笑いながら言った。

「む、メリア。家への方向はわかるか?私は連れられるがままにきてしまったのだが。」

聞かれたとたんメリアはサラから目線を反らした。

「…え?…ぬし…もしや、家の方向を知らぬのか……………」

「…だって…お兄ちゃんに…着いて行かないと…リーアさんの…家に行けないんだもん……………」

少しうつむきかげんでぼそと言った。

「じゃ、私とエリーが家まで送ってあげる。」

リーアが案内をかって出た。

「何回も行った事があるから道ぐらいわかるよ。」

「ん。リーア、助かる。エリーもすまないな。」

「じゃ、行こ。」

そうして4人は家の外に出た。すると、

「おせーぞ。お前ら。」

「もうちよいで置いてくどこだったよ。」

先に出たデイノとケンが待っていた。

「なーんだ。二人とも待つてくれたのね……ま、いつか。みんなでデイノの家まで行こっか。」

「……おーっ!」「……」

サラ以外の全員が片手を空に突き上げた。

「お、おーっ。」

サラが不思議な顔をしながら真似をした。

「あーっ!ダメダメそんなんじゃ。皆に合わせて。もう一度やろっぜ!」

すぐにケンがやり直しを強制した。リーアがめんどくさそうな顔をしたが、諦めて音頭をとり。

「ハイハイ……。じゃ、せーの……いくぞーっ!」

「……おーっ!」「……」

「……」

（帰り道）

デイノ達は「遠回りでもいいから綺麗な景色を見て帰ろーぜ。」と言うデイノの発想で、村外れの土手を歩いていた。

ピイイイイイ……

「あ、向こうで『ネック』が鳴いてるぜ!」

デイノが東の空を指差して言う。

「あ、本当だ。」

そう。

皆が笑っている時だった。

全てを破壊する。

漆黒の竜が二頭。

飛来したのは。

最初に気づいたのはディノだった。東の空から黒い物が二つ飛んできて、高速で頭上をかすめて飛んでいったのだ。

一瞬にして皆の顔から笑顔が消えて困惑や恐怖に変わる。

「なっ……、なんだ今の……。」

ケンが通り過ぎた飛翔物を見ながら言う。

（……………あの方向は確か……村の方向……！）

考えるより先にディノは走り出していた。

「お、おいっ……！ディノっ……！」

追うようにしてケンが走り出す。

「ケンッ！ディノッ！」

つられてエリーが二人を追った。

「エリーッ……！……メリア、サラ、何かおかしい……！行こう……！」

リーアが先陣を切って走り出した。

「あ、ああ……！」

「うんっ……！」

……………

村の入り口に来たディノは愕然とした。

家が、村が、木が、森が、動物が、人が、皆、燃えていた。黒い炎に包まれて。

村の中央で、黒い竜の一匹が黒い炎を吐き散らし、全てを飲み込んでいた。

竜は村で一番大きな家より遙かに大きく、どつしりと二本の足で立ち、両手の爪で家を、人を、切り裂き、翼が大きく、動かすだけで突風を起こし、黒く光る鱗は矢を、剣を、武器を一切受け付けておらず、両目が真つ赤に染まり、血に餓えた口で全てを喰った。人も、家も、簡単に。

人々の悲鳴が聞こえる。

「たつ、助けてくれえーっ！！」「痛い、痛い、痛iiiiiiiiっ！！」「お母さーんっ！！」「いやああああああっ！！」「兵士を呼べーっ！！」「熱iiiiiiiiっ！！」「わああああんっ！！」

「う、う、うわああああああっ！！」

ディノは錯乱した。初めて見る惨劇に、地獄に。

（なんなんだっ！なにがどうなっているんだ！？……………家は……………？
母さん……………母さんは？？）

ディノは走り出していた。ただ、ひたすら自分の母親の無事だけを考えて。

（あの角を曲がればいつもと変わらない家が……………！！）

燃えていた。黒い炎に包まれて。木の燃える焦げた匂いが充満していた。

「う、うわああああっ！！母さん！母さああああん！！」

燃えている家に向かって走り出そうとして後ろから腕を掴まれた。

「ディノっ！！待てっ！！今行けば死ぬ！バカな俺でもわかるっ！！」

聞き慣れた声だったが今は関係無かった。

「うるさいっ！！あそこには母さんがいるんだっ！！母さんがっ、

母さんがあつー!!」

掴まれた手を振りほどこうともがく。

「落ち着けよディノー!!まだ、あの中にディノの母さんがいるわけでもないだろっ!!もう逃げてるかも知れないぞっ!!」

「うるさいうるさいうるさいっ!!母さんを助けなきゃ!!母さんっ!!母さんっ!!」

「ディノっ!!」

がつんっ!!

「がつ!!?」

頬に激痛が走った。

殴られたとわかったのはすぐだった。殴ったのはケンだった。

「今は自分の命の方が大切だろ!!俺は知ってるんだぞ!!お前のお母さんはそんなに簡単に死んだりしないって!!」

「ケン……………」

ディノが落ち着きを取り戻しつつあった。

「ケンっ!!ディノっ!!」

また聞き慣れた声がした。声がした方を向くとエリーがいた。

ガアアアアアッ!!

こちらに気づいた竜が咆哮する。

「ひゃっ!!?」

「わっ!!?」

「うあっ!!?」

口々に短い悲鳴を上げた。

竜がゆっくりとエリーに向かって行った。

「あっ……………あ……………」

エリーが恐怖で身動きができなくなっていた。

「エリーイイツ!!逃げろおっ!!」

ケンはまだ叫ぶ事しか出来なかった。

「う、うわあああ!」

ディノはただ見ている事しか出来なかった。
竜の手がエリーに迫る。

プロローグ7（後書き）

最後まで読んでくれた方ありがとうございます。

一応……中途半端に切ったのは、この後の展開に迷っているためです。

察しがつく人もいると思いますが、まあ大方、当たると思います。

……しかし、なんででしょうか……作者は楽しくなってきたや
いました（笑）

プロローグ8（前書き）

あれ？変な所で切ってしまった。

プロローグ 8

ひゅんっ

空気を切り裂き何かが飛ぶ音が響く。

ギアアアアアッ!!

竜が悲鳴にも似たような咆哮をあげる。

エリーを掴もうとした竜の腕に一本の刀がぶっ刺さっていた。

黒竜は刺さった刀に痛みを感じたのか後ろによろけてエリーから離れた。

「!!」

そしてディノは驚いた。見たことのある両刃……父バルハラスの刀だった。

「ディノっ!!」

聞き慣れた声……いや、聞き慣れすぎた声。

「母さんっ!!」

刀の飛んできた方を見ると森の中からディノの母、レクスード・マリアが6本の刀を背に背負って現れた。

く村の入り口く

「な、なんなのよ……これは……!？」

リーアは絶望し、膝を折った。
村が、全て燃えていた。

「リーアっ!!」

メリアの叫び声で我に返る。

振り返るとメリアが真剣な眼差しで訴えていた。「逃げよう」と。

「……嫌よ……私……この村以外に……行くところ……無い……。」

今にも消えそうな声で、今にも泣き出しそうな表情で、『逃げる』
ことを拒否した。

「リーアさん……。」

メリアがすがるような目を見る。

「うつ、うわあああああっ!!」

後ろでサラが悲鳴を上げる。

「はあっ……はあっ……あ……うああ……やめろ……やめろ

……やめてくれえっ!!」

何かに怯えるように両手で頭を抱えていた。

「あっ……ひっ!!かつ、はっ……!!」

そして急にうずくまる様に倒れ込むと左手で胸を掴み過呼吸状態に
なってしまった。

「サラっ!!どうしたの!?サラあっ!!」

メリアがサラに駆け寄る。

「いやあああっ!!こんなの……なんで私達の村なのよおっ

!!……お父さん……お母さん……どこお……。」

リーアが泣き崩れる。

「……お兄ちゃん……お父さん……お

母さん……助けてよ……。」

メリアが泣き声で呟き呆然と立ち尽くす。

ガアアアアッ!!

急に黒龍が咆哮した。

近くにあった物が全て吹き飛んだ。建物も、人も、等しく紙のように。

三人の近くに竜と戦っていた大人の男性が吹き飛んできた。無惨にも、体を竜の爪で引き裂かれ、既にこと切れて、死体となっている状態だった。

どしゃつ、という音に気付き、リーアとメリアがそちらに目をむけると、口や鼻、頭から血を流し、胴体を両断された男性が、開いた瞳孔でこちらを睨んでいた。

瞬間、メリアとリーアの理性が弾ける。

「いやあああああああああああああああああつ！
！！！！」

二人は体中の酸素を、肺の中の全ての酸素を使って大声で叫んでいた。

（し……？死！？シ……？し、シ、死、死んだっ！？しんでいるっ？？
シンデイル……！？死んでい——っ！！）

リーアが気絶して、ぶっ倒れる。

「オエエエエッ——！ウエエエッ——！ウエエエエエッ——！
ビシャビシャビシャッ——！

メリアがものすごい勢いで襲ってきた吐き気に耐えきれず、胃の中の物を全て吐き出した。両手を口にあてて押さえようとしても止められなかった。

（……………もう……………何が……………訳が……………わかんない……………）

い……………。)

頭の中が真っ白になっていく。倒れようとする体を立て直そうともせず、ゆっくりと地面に倒れ…、

ガシッ!!

体が包まれるように支えられた。

支えた手は、腕は、大きくて、とっても、とっても、頼りになる手だった。

「……大丈夫かメリア…少し横になっておくか……………」

メリアは薄れていく意識ではっきりとだがその声を聞いた。そして直感した。

「……………おとう……………さん。」

――遡ること1時間――

「メリアが俺を呼んでる??」

「はい。なんでも必ず伝えといてくれと。」

警備兵がメリアの家に着いたのは昼過ぎ。それから例の二人を城の兵士に引き渡し、報告書と顛末書、更に、上司から憂さ晴らしに課せられた『行動報告書』等という馬鹿げた報告書を全て片付けて、一直線にバルハラスの元に向かってやつと事情を説明出来たのだ。
「…にしても報告が遅いな。」

「すみません……………」

「なんだ。言い訳しないのか。第23警備兵団、隊長の『グラシア・マックス』さん。」

「……………いえ。遅れたのは私の責任ですから。」

グラシア・マックスと呼ばれた男は全く姿勢を崩さずに、正直に答えた。

「はあ……………マックス。前々から言っているだろ。『固い』って。そうやってると、いずれ『全部の兵士が弱いのは私の責任です』って言いそうで怖ええよ。」

ため息交じりに軽く説教をした。

「……………これが私の…私なりの流儀ですから。」

真っ直ぐにバルハラスを見て答える。

「だからつつつて会長の馬鹿息子の言うことにいちいち聞いていたらキリねーぞ。あいつは親が多額の税金を俺らに支払っているからってなんでもしていいなんて考えていやがる。署長も署長で頭が上がりねーらしいし……………」

会長の馬鹿息子……………ジエンナ・コルデオはアルバン城の城下町の会長の一人息子で、小さい頃から甘やかされて育てられてきた、言わば『お坊っちゃん』。金があれば何でも手に入ると考えていて、ディノより歳が一つ上。将来は「楽に仕事したい。」と、言う理由でアルバン城の兵隊になろうと考えたらしい。

そこで親の、ジエンナ・ドムルクの登場だ。

「可愛い息子のためなら……………」

と、城の警備隊の署長に賄賂と書状を送り付け、

『私の一人息子が城の兵士になりたがっている。もしなれなかった場合は私は商会の皆に税金を払うことを止めさせる。』

と、記してあった。

実際、城の警備隊の運営費は税金だ。しかも、それはほぼ商会が払っていた。その商会全体が払わなくなると、一気に警備隊の給料や食費、武器や装備が買えなくなる。兵士達全員が自腹で生活など出

来る訳も無かった。

『背に腹は変えられない』

とばかりに警備隊の署長はこの条件を飲んだ。無論、王様等には言える訳も無かった。

なぜならアルバン城の王は不在だったからだ。そのため実質、王政を行っていたのは大臣だったが、この大臣も、てんで馬鹿みたいに金を欲しがっていた。

そんな奴は簡単だ。金をちらつかせれば勝手に食いつく。

だが、一応良心はあったようで、会長の国政に関する提案は一切取り入れなかった。

会長もこれ以上事を大きくする訳にもいかず渋々、国政から目を離れた。が、次に見つけたのがこの警備隊。自分の考えや息子の意見等を取り入れて、無駄な仕事が増していた。例えばジエンナ会長の息子の遊び相手。会長の家の庭掃除。会長の家の会計 ect… 数え出したらキリがない。だが、表面化しないようにこっそりとやらせるから質が悪い。『行動報告書』もその一つである。

「……………が、しかしだ。何で急に俺なんかを……………」

「さあ……………わかりません。ただ———」

「ただ？」

「あの目は戦士の目でした。」

それを聞いてバルハラスが座っていた椅子から跳ね起きる。

「なっ！！本当か！！」

「本当です。」

そう言われたバルハラスは少し考えてから命令を下した。

「総員戦闘配備！！用意を手早く行い、持てるだけの武器を持って城下町に行き避難命令を出せッ！！俺は先に出る！！」

そう大声で指示を出してから戦闘用の衣類を来てから飛び出していた。

「…了解しました。」

不思議そうに敬礼をし、行動を起こした。

——それから1時間後——

『があああん！があああん！があああん！があああん！があああん！』
町の中では退避用の金が鳴り響いていた。

プロローグ8（後書き）

あははははははははははははははははははははははは（狂）

「しっかりしろい」

バシッ

って！！何しやがるケン！！物語の中に帰れ！！

「黙れ作者！！今回俺の出番がなかったやないかい！！」

うるせー！！こつちだつてな『あーあ……………いい加減プロローグ終わらせなきゃ……………』とか考えてやってるんだ！！テメーの出番なんぞいちいち考えられん！！

「言つわりにはなかなか終わんないな。プロローグ。」

ぐさっ！！

「……………あれ？作者に矢印らしきものが刺さってんな。一応抜いてやろう。死なれたら困る。」

ずぼっ。ぴゅー……………

「うーん。こいつは困った。血が止まらないな。医者呼ぶか医者。」

黙れ。生きてる。意識もある。

「心配して損したな俺。」

……………で、何の用だ？ただ『出番が無かった』とだけ文句言いにきたなら次回でお前の出番無しな。

「ただ来るわけ無いだろ。読者はあんたの後書きにもう飽きてんだ。いい加減気づけ。忠告だ。忠告。」

お前、そんなキャラだったっけ？

(ギクツ)「い、良いだろキャラ崩壊ぐらい。どうせこれ書いてる時間は深夜なんだ。トリップしててもおかしくない。」

確かに……………くあゝあっ……………眠くなってきた。そろそろ寝るか……………

(ほっ)「あー、そうしろ、そうしろ。俺は帰る。」

ん。わかった。以上8年後のケンでした。

「言っなああああ！！！！このバカ作者あああああっ！！！」

プロローグ9（前書き）

さあ、大変だ。

プロローグ9

城の避難用の鐘がまだ鳴り響いていた。

人々は混乱し、ただ兵士の言うことだけを頼りに一応、自分たちの家より安全な城の中に逃げ込んで行った。

「順番にーっ！ー！ゆつくりとーっ！ー！押さないよーにっ！ー！」

兵士の一人が大声で案内をする。が、城に入るための橋で人の行列ができてしまっていた。

「わーっ！ー！」「押すなあっ！ー！」「お母さんどこー！ー！？」「なんだってんだ！？」「怪物が二匹、近くのラック村に出たらしいぞ！ー！」「この街が襲われるのか！？」「早く行け！ー！」

口々に勝手に話し合い、収集がつかなくなっていた。

それを城の見張り台からマックスは何も言わずに眺めていた。

「……………」

「マックス隊長！避難にはあと一時間はかかります！ー！」

後ろから来た兵士が報告する。

「見たら、わかる。全員に通達しろ。老人や子供を最優先に避難させるように。」

「はっ！ー！」

その兵士はきちつと敬礼をしてから駆け足で階段を降りていった。

それを確認したマックスは懷から片手サイズの望遠鏡を取り出して

それを覗く。覗いた先は、

ラック村。

くラック村。ディノの家付近く

「母さんっ!!」

ディノが歓喜の声をあげる。

「三人共、怪我は無いわね!!」

マリアがディノ達に駆け寄りながら無事を確かめる。

「早く逃げなさい!! 私は一リーを助けに行くから!!」

「わ、わかった!!」

慌てながら返事をしたディノは、先程の様子と違ってかわって逃げる事に全力を注ぎ始めた。

まずケンの手を引っ張るようにマリアが現れた森に逃げ込んだ。

ケンは引っ張られるがままディノについていった。

一方マリアは背に刀を背負ったまま、エリーと黒龍の間に割って入った。

「こっちょバーカ!!」

言い終わるか終わらないうちに竜に刺さっていた剣をものすごい速さで移動しながら引っ抜き、竜の腕をかけ上げる。

ゴアアアアアアッ!!

竜が力任せに腕を振るい、マリアを落とそうとする。

マリアは、無理にしがみつこうともせず、自ら飛び降りた。そしてその近くは一リーがいた。

「ディ、ディノのお母さ...えっ!??」

マリアは一リーに近づくと、片手でエリーの服の背中の辺りを掴むと、

「ふんっ!!」

ディノ達のところにぶん投げた。

「つとー!!」

ディノがすぐに反応して、エリーを受け止め――、
「おわっ!?!」

――きれずにひっくり返った。が、エリーには怪我を一つも負わせなかった。

ちなみにエリーはと言うと、何が起こったのかわからず、ただ呆けていた。

が、その方がマリアとしてはありがたかったのだ。

抵抗でもされて無理に投げつけたらコントロールが狂い、あらぬ方向に投げ飛ばす可能性があったからだ。

マリアは全員の無事を確認してから、更に背負っていた刀を全てディノ達に転がすように投げた。

それから竜と真っ正面から向き合い、大声で叫ぶ。

「ディノ――その刀を持って逃げなさい――森を真っ直ぐ抜けければアルバンの城だから入れてもらえるはず――!!」

「母さんはどうするの!?!」

「私はこいつを倒してか後を追うわ。必ず――だから早く逃げなさい――!!」

「でもっ――!!」

ディノがうるたえるが、

「ディノっ――! あなたがしっかりメリアを、皆を守るのよ――! 絶対にっ――!!」

「………わかった。俺が………皆を守るから………母さんは必ずそいつに勝って――!!」

マリアの一言で自分の役目を見つける。そして刀を一本一本手早く拾い集め、強引に背負った。

「よしっ。必ず守りなさい。皆を………。」

それを確認したマリアは静かにうなずいて、ディノにそう言い聞か

せた。

「わかった！！約束だからねっ……………！！ケン、エリー、行こうっ！！」

「ディノっ！！いいのかよ！！」

ケンが不安げに聞く。

「大丈夫！！俺の母さんは嘘をつかないっ！！今まで嘘をついたことがないから！！」

ディノが自身満々に言い切る。

「マリアさんっ！！」

エリーが突然叫ぶ！！

ギャキイイイン……………

竜の爪がマリアに襲いかかる。
が、それをマリアは受けきる。

「早く逃げなさいっ！！」

マリアが怒鳴る。

「……………行こうっ！！」

ディノが走り出す。

「……………っ……………！！」

ケンも続く。

「…マリアさん……………」

エリーが一番最後に走り出す。

ディノが途中で一回振り返ったが、すぐに前を向いて走り出した。

三人が森の中に消えてからマリアが一言呟く。

「……………ごめんねディノ。母さん……………最後に嘘、ついちゃった……………」

戦闘経験が多いマリアは——レクサード・マリアは、竜の腕にかけ上がった時に、感覚的に気づいていた。

——勝てない——

筋力的な差だけではない。

スピードはこちらがやや上回っていると仮定しても、全体的に、総合的に、全てを下回っていた。

この世に絶対があるとするならば、正に今の状況だろうとマリアは自嘲する。

「……………でも、時間だけは稼がなきゃいけないのよね……………。あの子達の未来のためにも……………」

覚悟を決める。

「レクサード・マリア……………いえ。

アルバン・ディー・アメリア——

いま、竜を切る一つの刃となる——！」

「……………おとう……………さん。」

メリアは一言そう言って、安心したように気を失った。

「…遅れてすまなかったな……………メリア。」

バルハラスがメリアとリーアとサラの三人を安全な場所に寝かせてから背負った1メートル弱の長剣を抜き放ち、竜に接近を開始する。

「村を散々荒らしやがって……………」

覚悟はできているんだろうなあっ!!」

バルハラスが――

本気で怒った。

竜が殺気を感じてこちらに気づく。攻撃を行っていた兵士や村の人を全員無視してバルハラスの方にだけ向いた。

グアアアッ!!

吠えてから、バルハラスだけを尻ぎ払うように尻尾をぶん回す。

それに対してバルハラスは、避けようともせず、受けようともせず、前に踏み込んだ。

その踏み込みは鋭く、早く、勢いを殺さず、一気に、竜の懷まで入った。

バルハラスが踏み込んだ地面が爆ぜていた。

「あああああああああっ!!!!」

竜の尻尾が当たる瞬間には決着が着いていた。

バルハラスの剣は竜の胸を穿った。

綺麗に丸く円のようにぽっかりと穴を開けた。

グギヤアアアアッ!!

断末魔に似た悲鳴を上げて倒れた。

プロローグ9（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

次でプロローグはラスト！！の予定。

まさかここまで長々語ることになるとは……………我ながら無計画さがにじみ出でます。（笑）

「笑い事じゃないでしょ。」

いやホントホント笑い事じゃない……………ってえ、マ、マコッさん！？？なぜここに？？

「『マコッさん』でわかんない人は、この作者の別作品の『世界で一つのアレが飛ぶ』をよろしくね。」

ああ、はい……………じゃなくて、何しにきたんですか！？？あなたは『世界で』（ry）の主要メンバーでしょ！！

「最近どうも『世界で』（ry）のネタが雑だって苦情がきてんのよ。」

え？誰？？

「俺……！」

よし。伊吹。歯あ食いしばれ……………。

「えっ！？ちよっ！？グーは止めようよグーは！！ってか作者！！」
「本編でネタが尽きた」とか友人に話したらしいじゃんか！！」

ああ。言ったが？

「だとしたらなんで続けてんの！？」

あゝ。はいはい成る程ね。理由は俺の中じゃ一応、卒業式までやるつもりだから。

「うわっ、長っ！！あんなにダラダラやってったら終わんねーよ！！」

あ、時間だ。また次回。

「都合悪くなったからっておわらせるなーっ!!」

「……あと最近、あとがきにキャラ出てるのはネタがないんだと思う……」

黙れ政。

「すいませんでした。」

プロローグ10（前書き）

プロローグ最終回

プロローグ10

「はあっ……………はあっ……………はあっ……………」

三人は夜の森の中を走っていた。
ただひたすら城に向かって。

ディノが真っ先に城下町に出る。

「はあっ……………はあっ……………誰も……………いない……………」

アルバンの城下町は、いつも、いつでも活気づいていて賑やかだったのだが、今はその面影が全く無く辺りは、しん。としていた。

ディノの後ろから走ってくる人の気配。

「はあっはあっはあっはあっ……………ディノ早いつて……………エリーを……………置いてきてるって……………」

ケンが何とかディノに追い付いた。

「悪い。エリーは？」

ディノがケンを見ながら言う。

「……………はあ……………あ、あそこ。」
後ろのエリーを指差す。

エリーは今にも倒れそうなくらいフラフラになりながらこちらに走ってきていた。

「……………ケン。先に城に行ってくれ。この様子だと、城へと続く橋が閉じられている可能性がある。」

「わかった。ま、閉じられていても、俺のお父さんがいれば大丈夫だ。」

「そつか。じゃあ、お願いな。」

「任せとけっ!!」

そう言くとケンは走って行った。

「エリーっ!!もう少しだ。頑張れっ!!」

エリーに向かって大声で叫ぶ。

「……………ディ……………ディノ……………はあっ……………はあっ……………はあっ……………はあっ……………」

「

何とかディノの元までたどり着いた。

「……………ご、ごめんなさい……………はあっ……………わ、私……………」

「それよりも、エリー。まだ走れるか??」

ディノが心配そうに聞く。

「はあっ……………はあっ……………少し……………休ませ……………て……………」

エリーは今にもぶっ倒れる寸前まできていた。

それが多分わかったのだろう。ディノは背負っていた刀を全ておろしてエリーに背を向けた。

「今は逃げる事が先だから、休んでいられない。だから、エリーの分は俺が走る。乗って。」

(駄目……………そしたら私は……………ディノに迷惑かけちゃ……………
……………)

エリーの見ている世界が歪む。

地面が迫って辺りが真っ暗になる。

「……………エリー?……………!!!大丈夫か!?しっかりしてくれ!!!エリー!??エリーィッ!!!」

ディノが必死に叫ぶ。しかし、エリーの耳には届かなかった。

……ここは……どこだろう……あれから……どうなっ
ただろう……サラが倒れて……リーアが……叫んで……
……私は……気持ち悪くなって……死体がこつちを見て、死
体が死体が死体が死体が死体死体死体死体死体死体死体死
体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死体死

「キャアアアアアアッ！！！！！！」

メリアは絶叫していた。

「……はあつ、はあつ、はあつ、はあつ、はあつ、はあつ……。」

と、サラとリーアが横たわっていて、自分は何処かのテントの中で寝かされていた。

「おお。気づいたか。急に悲鳴を上げたからびっくりしたぞ。」

テントの外から声がして、バルハラスが入ってきた。

「お……とう……さん??」

メリアが困惑した目付きでバルハラスを見る。

「おいおい、不安そうに聞くな。間違いなく父さんだよ。」

いつもの調子でメリアに言う。

「ここは何処!？」

「アルバンの城の付近だ。村の人に手伝って貰って三人を運んできた。」

バルハラスがお茶を淹れながら呑気に言う。

「……竜は？？村を襲った竜は！？」

「ああ、さつき一匹倒したよ。さあ、これでも飲みなさい。それと、もうしばらく寝ていなさい。」

メリアに淹れ終わったお茶を差し出しながら休むように進める。

「駄目！！竜は二匹いたの！！」

「……！！……メリア。それは本当か！？」

バルハラスの表情が一気に険しくなる。

「私達見たの！！竜が二匹村に向かったのを！！」

「……ちっ！メリア！これを頼む。あとその二人も！」

そう言ってバルハラスはお茶を淹れたコップをメリアに強引に手渡すと血相を変えてテントから出ていった。

（もしメリアの言った事が……信じたくは無いが……本当だとしたら……大変だ！！……しかし、じゃあ何故、見当たらないんだ？……まさかっ！！）

グオオオオオツ！！

突然、竜の咆哮が森の中から轟く。

「……！！マリアアアアアアッ！！」

竜の咆哮した先の空で――

無惨にも、無情にも――

アルバン・デイ・アメリア……レクサード・マリアは――
糸の切れた人形のように――

――宙を舞っていた

「マリアアアアアアッ！！」

バルハラスは叫びながら駆け出していた。

竜が空中に飛ばしたマリアを食おうと口を大きく開ける。

「っ……おおおおおっ！！」

ブウンッ！！

バルハラスが背負っていた剣を竜にめがけてぶん投げる。
投げた剣は一直線に竜の首の辺りに突き刺さる。

グギャアアアアッ！！

悲鳴のような咆哮をして、よろけた。マリアが、重力の法則に従って落下していく。

「っ……おおおおおー！！」

バルハラスがマリアの真下にまで走り続ける。
地面まであと数メートル。

バルハラスは滑るようにマリアの真下に着く。

マリアが落下する。

それをバルハラスは受け止めた。

「おいっ！！マリア！！マリアッ！！しっかりしろ！！マリアッ！！」

バルハラスがマリアの顔を軽く叩きながら声をかける。

その時、バルハラスは気づいた。胸から腰にかけて鋭利な刃物の様なもので斬られた後。背中には同じように斬られた後が何カ所もあり、右腕が肩からもぎ取られて、口や頭から大量の血が流れていた。

「っ……あ、あな……た……ごめ……な、さ……い。」

マリアが弱々しく喋る。

バルハラスの後ろでは竜が慌てて飛び出し、逃げ出すのを感じる。

「お前らああああああああっ！！」

憤怒したバルハラスが竜に向かって吠える。

「……あ、……あな……た……」

マリアがバルハラスの手を強く、強く握る。

「……なんだ？……マリア？……どうした？」

マリアをとて心配するように顔を見る。

「最後に……あの子達に……伝えて……欲しい……言葉……ゴホッ
！ゴホッ！ゴ……バツ……」

咳と共に口から血が吹き出る。

「……！……ああ……なんだ？言ってくれ……。」

「……メリア……あなたには……普通に……生活して欲しかった……だ
から……必ず……好きな人と……結婚しなさい……。」

「ああ……伝える……必ず伝える……！約束する……！」

「……ディノ……あなたは…………ディーの血を引いてる…………から……運
命に……負けちゃ駄目……。」

「わかった……伝える……！伝えるから……！もう喋るなっ……！これ以上無
理をすると本当に……。」

「……無理よ……もう……私は……自分の事は自分でわかるもの……死
ぬのって…………怖いわね……。」

マリアの瞳から涙が零れる。

「そんなこと言うなあッ……！まだ死ぬわけじゃない……！」

（……願望だ。それは俺の願いでしかない……。）

バルハラスは長年の経験から、

既に解っていた。

マリアは、

死ぬと。

「……ごめんね。」

……あなた……ディノ……約束……守れなくて。

……それと、

ありがとう

……。。。」

マリアが一瞬、笑ってから、ゆっくりと瞳を閉じた。
握っていた手から力が無くなり地面に落ちる。

「……マリア……マリア？……マリアッ！！………うあああ
あああああああああああつ！！！」
一人、バルハラスは闇夜の空に大声で吠えた。

「……………母さん……………??」

ディノが急にふっと夜空を見る。

満天の星が異様に光ってみえ、大きな流れ星が一つ流れた。

ディノは、エリーと刀を背負ったまま城まで走りきった。

城にはケンの父親が勤務していて、ケンが父親に伝えたのだろう。

城の裏口から入れて貰えた。

エリーをすぐに医務室に運び込み、手当をお願いしてから、何となく、城の見張り台に登った時だった。

その流れ星がディノを不吉な予感に浸らせた。が、すぐに気のせいだと思い返し、再び空の星に目をやろうとした時だった。

「……………あれ？」

街の中から二人の人がやって来ていた。

一人は大人の男性だろう。背丈が高く、体がかっしりしていそうだった。だが、両肩が少し出っ張っているようだった。

左側には子供と思わしき人物が連れ添うように歩いてくる。

（誰だろう……………）

ディノはジーツと眺めていた。

と、城から一人、向かってくる人達に走って行った。

暗くてよく判らなかったが、多分その人達の知り合いだとディノは思った。

走って行った人が、案内するように城に戻って来る。

(……………父さん???)
唐突にそう感じた。暗くて顔も見えないし、確証も何もなかった。
だが、何故かそう感じてしまった。
デイノは見張り台からすぐに城の中へと戻り、城の入り口まで駆けていった。

〔城門内側〕

デイノが階段をかけ降りて、入ってきた人達を見た。
今度は城の灯してある蝋燭や松明のおかげで明るく照らされていたため、相手の顔まではっきりと判った。
城に入ってきたのは――

デイノの予想通り、父、レクサード・バルハラスだった。
バルハラスは肩に乗せていたサラとリーアを兵士に渡して、何らかの指示を出しているようだった。

見張り台から見たときに両肩がおかしかったのは二人を肩に乗せていたからだろう。

「父さんッ!!」

デイノが走りながら呼ぶ。

「……………!!デイノか??」

バルハラスが気づいてこちらを向いた。

「?……………父さん。リーアとサラはどうしたの?」

気絶している二人を見て不思議そうに聞く。

「大丈夫。気絶してるだけだ。竜に襲われていたからな、多分そのせいだろう。」

バルハラスは、無表情で淡々と答える。

「……………あれ?メリアは?」

不思議に思ったデイノが聞く。

「……………あそこだ。」

バルハラスが指を指す先には、メリアが項垂れるように椅子に座っていた。

「…メリア？どうし……」

デイノが近づきながら声をかけたときに、気づいた。

——泣いてる——？

メリアがデイノを見る。その目には涙が溜まって溢れていた。

「お兄ちゃん……」

「メリア……お前どうし——」

急にメリアが抱きついてきた。

「メッ、メリア??」

デイノが慌てながら困惑する。

「……怖かった……」

メリアが小さな声で言う。

「……私、死んじゃうんじゃないかって……そしたらお兄ちゃんやお母さん。お父さんに会えなくなるって思ったら……」

怖くて怖くて……そしたら、体が二つに斬られた男の人が飛ばされてきて……訳わかんなくなつて……気持ち悪くなつて……

…お父さんが来てくれなかったら、

私………私………う……う……うあああああああああああ
あああん！わああああああああああああん！」

メリアはデイノに抱きつきながら嗚咽を繰り返し、ひたすら泣いた。

「……メリア……」

デイノが優しくメリアを抱き寄せる。

二人は暫くの間、静かに寄り添っていた。

「…………メリア。落ち着いたか……………??」

「……………うん……………」

「そっか……………良かった……………父さん。母さんは?」

ディノがおもむろに聞く。

バルハラスは一瞬、ほんの一瞬だが、とても悲しそうな顔をし、一気に厳格な顔になりディノとメリアに向き合い、ゆっくりと言った。
「……………二人とも大事な話がある。人のいない場所に行こう。」

（見張り台）

「……………で、話ってなに?父さん。」

ディノが不思議そうな顔をしてバルハラスを見る。

「……………ディノ。母さんから刀を預かったか?」

空を見ながらバルハラスが言う。

「え?ああ。うん。ここにあるよ。」

ディノが後ろを指す。

そこには無造作におかれた6本の刀。

バルハラスはそれを確認するとディノとメリアに向かって言った。

「母さんは……………」

———死んだ—————。

「……………えっ……………」

ディノが固まる。

「嘘……………」

メリアが膝から崩れる。

「……………嘘だッ!!母さんは言ってた!!『必ず追い付く』って!!死んだなんて嘘だッ!!父さんの嘘つきいっ!!」

ディノが憤慨してバルハラスにくっつかかる。

「…………ディノ。メリア。父さんは母さんから遺言を預かった。今から伝える。」

「嫌よ！嫌よ！嫌やあつ！！聞きたくないっ！！」

メリアが首を横に振りながら両手で耳を塞ぐ。

「聞く必要なんて無い！！母さんは生きているんだ！！絶対につ！！」

ディノが反発する。

「今から言うから二人とも覚えておいてくれ…………」

『メリア。あなたには普通に生活して欲しかった。だから必ず、好きな人と結婚しなさい。』

「…………母…………さん…………。う、うわあああああんっ！！」

メリアが泣き崩れる。

構わずバルハラスは続ける。

「…………ディノ。あなたはディーの血を引いてるから、運命に負けちゃ駄目。」

「…………っ！…………俺は…………俺はあつ！！ちくしょおおおおっ！！」

バルハラスが言い終わると同時にディノは走り出していた。

城の階段をかけ降りて、周りの人を押し退け、城から飛び出し、城下町を通りすぎ、森を駆け抜け、村に出た。

崩れてしまつて、

壊れてしまつて、

無惨になった、

悲惨になった、

生まれ育った村に。

自分の家の前まで走りきって止まった。家の前に盛り上がった土があり、刀が刺してあった。刀の刀身には刀傷が深く文字のように彫られていた。

レクサード・マリア

ここに眠る。

「……………う…………ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オツ！！！！！」
オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」
ディノは真つ暗な空に向かって吠えた。

そして――

誓う。

「竜を……殺す！！」

プロローグ10（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございます。

なんとか形だけまとめる事が出来ました。

最終回が長いのは作者の力量不足です。申し訳ありません。
次回はそれから何年か後の話です。

それでは……………

T o b e c o n t i n u e d …

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3048r/>

Dロード（プロローグ）

2011年7月17日18時30分発行